

論 説

「信頼感」の形成に関する実証的国際比較研究

佐々木 正道

目次

1. 予備的考察
2. データと分析
3. 分析結果
4. 要約・結論

1. 予備的考察

信頼の研究は、社会学の重要課題として、古来より、テニース、ジンメル、デュルケーム、パーソンズ、ルーマン、ギデンズ、バーバー、ベックなど多くの理論家によって、長い間実証的裏付けのないまま議論されてきた。例えば、G. ジンメル (Simmel 1950: 326) は、「信頼は社会の統合力の最も要となるものの一つである」と力説し、社会学の大御所である N. ルーマン (Luhmann 1979: 8) も、「社会システムが複雑性と混乱を増してきている状況において、信頼は社会システムの複雑性を減じる上で重要な役割を演じてきている」と述べている。さらに、P. スズトンプカ (Sztompka 2014: 493) は、「信頼は予想と確実性の置換となり得る」と主張した。S. ボック (Bok 1978: 26) に至っては、「信頼がなければ、社会は成り立たない」と断言した。ほかにも多くの研究者が、信頼は人間関係や集団関係において重要な役割を演じると強調してきた (Golembiewski & McConkie 1975; Lewis & Weigart 1985; Zucker 1986 を参照のこと)。経済システムについていえば、経済活動において、信頼にかなり依存するところが大きい。というのは、信頼がなければ、商取引はできないからである (Hirsch 1978)。

1990年代になって、信頼に関する研究論文が主に欧米において社会学、心理学、政治学、経済学、経営学などの分野で、多数発表されるようになってきた。日本においては、心理学で実証的研究が近年行われてきており、その他の分野においても、調査データに基づく実証的研究は、数は少ないものの本格的に行なわれてきている。例えば国外での主な研究は、Delhey & Newton 2003; Paxton 2007; Gheorghiu et al. 2009 などで、国内では Yamagishi 2000; Yamagishi et al. 1998, 1999, 2005; Yoshino 2002, 2009; 佐々木 2014; Sasaki 2019, 2022; Sasaki & Marsh 2012; Sasaki & Saito 2014; 佐々木他 2018 などがある。

信頼の研究が盛んにおこなわれるようになったのは、社会変容に伴って、信頼の崩壊が生じつ

つあるのが主な原因である。伝統的価値観の衰退、家族の機能の変化、社会の情報化と共にコミュニケーション形態の変化、人々の相互関係や役割の多様化、社会の個人化の進展に伴う価値観や生活スタイルの多様化、人々の移動の増大により見知らぬ人との出会いなどである。昨今では国内でも信頼を裏切る事件が頻発しており、信頼の揺らぎが第1次集団においても生じている。

その信頼のダイナミズムを理解する上で、文化的相違を埋めるための実証的研究と理論的モデルの構築が求められている (Barber 1983; Luhmann 1979; Dietz et al. 2010 を参照のこと)。

本研究の目的は、「信頼感」の形成にとって非常に重要ともいわれてきた親による子供の「信頼感」の社会化、親の子供との約束の順守、裏切られた経験の有無が、子供が成人になったときの「信頼感」とどのように関連しているかを、先行研究を踏まえ、解明を試みることである。

1) 親による子供の「信頼感」の社会化

親による子供の「信頼感」についての社会化の研究は、E. エリクソン (Erikson 1950/1963) の初期の業績に負うところが大きい。K. ロッテンバーグ (Rotenberg 1995: 714) は「基本的な信頼感と不信感のコンフリクトは幼少期に現われる」と述べている。さらに彼は、「エリクソンによると、もし親が絶対的に頼れる養育の担い手であるならば、幼児は、自分の身近な人に対して信頼する志向を取り入れるようになり、さらに自分を取り巻く世界をも信頼できるようになる。また不信については、逆なことがいえる。したがって、幼児の親や世話をする人は、信頼または不信の行動の模範を幼児に吹き込む者となる」(ibid, 714) と述べている。幼少期の初期の段階で親から信頼と不信を学ぶことは、¹⁾ 子供の発達にとってとても大切な要素となるとの指摘が種々の研究においても²⁾ されている。(Barber 1983; Baier 1986; Holmes & Rempel 1989; Rotenberg 1991; Bernath & Feshbach 1995; Newton 1997; Sztompka 1999; Uslaner 2002; Rotenberg et al. 2004; Sutter & Kocher 2007; Bussey 2010; Lamb & Lewis 2011 を参照のこと)。

J. ジェスイノ (Jesuino 2008: 186) は、「信頼感または不信感社会化を通して発達するが、この社会化は普遍的ではなく、社会的そして文化的に埋め込まれている」と述べている。

幼児が成長するにつれ、「信頼感」の発達が広範囲に及び、子供は信頼と不信に関連するより複雑なニューアンスについて認知的理解を得るようになる。そしてその重要な要素であるバランスを認識するようになる。J. スメタナ (Smetana, 2010: 223) は、「エリクソン (1950/1963) の発達理論の中で幼少期の早い段階で信頼感と不信感の適切なバランスをいかに発達させるかは、生涯にわたって解決しなければならない規範的危機の一つである。特に後の青年期のアイデンティティの発達の中心となる危機をいかに切り抜けるかにある」と指摘している。

「信頼感」についての社会化の過程において、特に学童期から青年期にかけて、例えば約束について学ぶとき、親は子供に信頼できるか否かについて、徐々に教え始める。このことは、子供や青年が将来他人をどのようにみるかに影響を及ぼすこととなる (Uslaner 1999, 2000 を参照のこと)。

2) 親の子供との約束の順守³⁾

親の子供との約束の順守は、子供にとって将来他人や自分を取り巻く世界に対して信頼、または頼りにする上で自信を育むことになり、将来の一般的見通しについての基本的態度を形成する。

親（また重要な他者）との約束の不履行は、他者や自分を取り巻く世界を信頼することや頼りにすることについての自信を喪失する。よくみられるように子供は同じ仲間と付き合い始めて貸し借りを通して互酬性を理解するようになる。例えば、子供はあるものを仲間に貸したらそれを返してくれるだろうかと思う。また子供は何かを他者にしたら、相手もそれに見合うことをしてくれるであろうか、仲間たちはフェアプレーするだろうか、仲間たちはお互いに忠実だろうかなどと考える。これらの約束に関する倫理的・道徳的訓育は、すべて、子供の「信頼感」の社会化の発達に寄与する（Rotenberg 2010; Holmes & Rempel 1989; Mikulincer 1998; Miller & Rempel 2004 を参照のこと）。

約束には、互酬性の要素が内在し、それは他人を頼りにできることと信頼できることを意味する（Bussey 2010; Randall et al. 2010; Rotenberg 2010 を参照のこと）。約束が守られない状況、つまり約束が破られることにより子供は社会的接触を回避し、延いては、社会的スキル、社会的支持、仲間グループとの関係、親密な人間関係を得ることや、学業を達成することに失敗するなどの危険性が内在する（Rotenberg 2010）。

そのような状況では、子供は約束を守る気持ちを失う傾向があり、裏切られたと思うようになる。そして、約束を守るか否かの結果はその人の基礎となり将来の見通しに直接影響を与える。

3) 裏切りられた経験⁴⁾

裏切りは信頼に違反することによってもたらされる感情的状態である。L. ウェーバーと A. カーター（Weber and Carter 2003: 80）は、「信頼はそれに違反する機会を生むことになる。我々が他人を信頼するとき、本来はリスクを伴わないと思う。しかしそれが分かっているいないにかかわらずリスクを生むように方向づけられている。最も基本的レベルで、信頼がその違反による典型的な自己自滅を導くことになるのは、それが道徳的にダイナミックな基本であることを認識しない場合である」と述べている。

裏切りは、信頼関係を再構築する可能性にマイナスの影響を及ぼす点で、かなり重きをなすので、一旦裏切るとそれを克服するのはことのほか難しい。（Karamer & Cook 2004; Six 2005 を参照のこと）。そして、裏切り行為は信頼関係に広範囲の影響を及ぼす。信頼に違反することについて W. ジョンズと S. スコット（Jones & Scott 1997: 475）は、「裏切りは、信頼と信義に違反するだけでなく不義、違約、今まで築いてきたそして進行している関係を害することにまで及ぶ」と述べている。N. ポッター（Potter 2002: 23）によると、「過去の裏切られた経験が現在における不信感の気質をかなり形作る」と結論づけている。

2. データと分析

本研究では、科研の助成を受け、7カ国（日本、アメリカ、ドイツ、チェコ、ロシア、トルコ、フィンランド）・台湾において、面接法による全国調査を実施したデータを使用する。（調査の詳細については、付録1を参照のこと）。

対象国・台湾の信頼度レベルは、世界価値観調査（ASEP/JDS 2010）に基づき分類した。信頼

度スケールは、高信頼国のフィンランド (117.5)、比較的高信頼国の日本 (79.6)、アメリカ (78.8)、ドイツ (75.8) と台湾 (70.0)、中低信頼国のロシア (55.4) とチェコ (48.8)、そして低信頼国のトルコ (10.2) である。

7カ国・台湾のそれぞれの被験者に対して質問がそれぞれの言語へ適切に翻訳されているかどうかは重要な点である。したがって、翻訳のバック翻訳のプリテストで確認を行った。

分析には成人の「信頼感」スケールとして世界の意識調査 (例えば、General Social Survey (GSS)、ISSP (International Social Survey Programme)、WVS (World Value Survey)、ESS (European Social Survey)) の中で用いられてきた次の3問⁵⁾を使用する。

問1 たいていの人は、他人の役にたとうとしていると思いますか、それとも自分のことだけを考えていると思いますか。次の中からあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

(○は1つ)

- 1 他人の役にたとうとしている
- 2 自分のことだけを考えている
- 3 その他 (具体的に)
- 4 わからない

問2 他人は、機会があれば、あなたを利用しようとしていると思いますか、それともそんなことはないと思いますか。次の中からあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。(○は1つ)

- 1 他人は機会があれば自分を利用しようとしていると思う
- 2 そんなことはないと思う
- 3 その他 (具体的に)
- 4 わからない

問3⁶⁾ あなたは、たいていの人は信頼できると思いますか、それとも、用心するにこしたことはないと思いますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。(○は1つ)

- 1 信頼できる
- 2 用心するにこしたことはない
- 3 その他 (具体的に)
- 4 わからない

各国・台湾のそれぞれの質問に対する回答の割合を付録2の表1に示す。

本研究では、分析に最適尺度法を使用する。この手法は、数学的には、1952年に統計数理研究所の林知己夫教授により開発された「林の数量化Ⅲ類」や、1962年にパリ第6大学のJ. ベンゼクリ (Benzécri) 教授によって開発された「多重対応分析」と同等であるが、それらはその後各々の分野で発展した。最初は主に英語圏以外の研究者によって使用されていたが、1981年以降、「コレスポネンス分析」、「最適尺度法」、「双対尺度法」などとして世界中で盛んに使用されるようになった。この分析手法は社会科学の分野のみならず自然科学の分野などでの適用が可能であるが、特に社会調査のカテゴリカルを伴った回答の多項目クロス集計の同時分析に役立つ。つまり、特定の回答サンプル集団に対し、分析結果は多次元空間で、回答パターンの類似性が強い個体 (集団) は近く、類似性が弱い個体 (集団) は遠くに布置され、他方、質問項目の各選択肢

の被選択パターンの類似性が強いものどうしは近くに、弱いものどうしは遠くに布置される (Greenacre & Blasius 1994; Greenacre 2004 を参照のこと)。この手法は必ずしも因果関係を調べることを目的としていない。社会学の碩学 P. ブルデュー (Bourdieu) が好んで使用したのでフランス社会学会では、ブルデューの統計的手法と呼ぶこともある (Le Roux & Routanet 2010: 4)。

3. 分析結果

分析には、「信頼感」スケールを構成する前述の3問と、次の問4、問5、問6を使用した。

問4. それでは、子供のとき親御さんから「たいていの人は信頼できる」、それとも「用心するにこしたことはない」と教えられましたか。

1. 信頼できると教えられた
2. 用心するにこしたことはないと教えられた
3. そのようなことは教えられなかった
8. その他
9. わからない

問5. 子供のとき親御さんはあなたとの約束を守りましたか。この中からお答えください。

1. よく守った
2. まあまあ守った
3. あまり守らなかった
4. まったく守らなかった
5. 親と約束をすることはなかった
6. その他 (記入)
9. わからない

問6. あなたは過去に他人から裏切られた経験がありますか。

1. ある
2. ない
9. わからない

問4、問5、問6の集計表を次の表1、2、3に示す。

表1 各国・台湾ごとの問4の回答の集計表 (%)

	日本 (924)	台湾 (1,005)	アメリカ (1,008)	ドイツ (1,007)	チェコ (981)	ロシア (1,600)	トルコ (1,007)	フィン ランド (881)
1. 信用できると教えられた	32	23	51	35	32	41	29	51
2. 用心するにこしたことはない と教えられた	42	59	41	50	52	43	60	39
3. そのようなことは 教えられなかった	21	13	6	11	11	11	8	4
8. その他	1	0	1	1	1	1	1	1
9. わからない	4	4	2	3	3	5	3	6

注：数値は四捨五入のため合計は必ずしも100%にはならない。

表2 各国・台湾ごとの問5の回答の集計表 (%)

	日本 (924)	台湾 (1,005)	アメリカ (1,008)	ドイツ (1,007)	チェコ (981)	ロシア (1,600)	トルコ (1,007)	フィン ランド (881)
有効回収数								
1. よく守った	37	24	54	33	44	58	53	76
2. まあまあ守った	50	57	35	52	42	25	34	17
3. あまり守らなかった	7	11	6	7	8	6	7	4
4. まったく守らなかった	0	1	2	1	1	2	4	1
5. 親と約束をすることはなかった	3	3	2	4	4	5	1	1
6. その他	1	0	0	0	1	1	0	0
9. わからない	2	4	1	3	1	3	1	1

注：数値は四捨五入のため合計は必ずしも100%にはならない。

表3 各国・台湾ごとの問6の回答の集計表 (%)

	日本 (924)	台湾 (1,005)	アメリカ (1,008)	ドイツ (1,007)	チェコ (981)	ロシア (1,600)	トルコ (1,007)	フィン ランド (881)
有効回収数								
1. ある	47	49	77	50	75	56	38	74
2. ない	49	41	18	40	18	31	59	24
3. わからない	4	11	6	10	7	13	4	2

注：数値は四捨五入のため合計は必ずしも100%にはならない。

なお、問1から問6の回答において、「その他」と「わからない」は、選択肢として面接調査で提示されたものではないので、それらは分析から除外した（その理由については Le Roux & Rouanet 2010: 62 を参照のこと）。また回答の割合が5%以下の選択肢も分析結果の安定性を考慮して、分析から除外した（その理由についても Le Roux & Rouanet 2010: 61-62 を参照のこと）。したがって、フィンランドの間4の回答の「そのようなことは教えられなかった」は、分析から除いた。また、質問の回答項目数をできるだけ揃えることが、分析する上で懲憊されている（LeRoux & Rouanet (2010: 38 を参照のこと）。したがって、問5の回答項目の「よく守った」と「まあまあ守った」は「守った」に、「まったく守らない」と「あまり守らない」は「守らない」とした。

6問の回答項目の関係について、国・台湾ごとに多重コレスポネンス分析を行った。図1から図8はそれらの分析結果の布置図⁷⁾である。なお、固有値はそれぞれの布置図の枠外に記載する。それらの数値がすべて1以上であるので、データとの関連が強いといえる。

これらの布置図において「信頼感」スケールを構成する3問の肯定的回答と否定的回答はそれぞれまとまって、1軸の原点から左右に分離し布置する。

したがって3問の肯定的回答の集合体を「高信頼」クラスター、否定的回答の集合体を「低信頼感」クラスターと命名し、それぞれは「高信頼感」の人と「低信頼感」の人を意味する。

次に、それぞれの国・台湾の布置図から、子供のとき親から信頼または用心を教えられたか、子供のとき親は約束を守ったか、過去に裏切られた経験があるかどうか⁸⁾が2つの「信頼感」クラスターとどのように関連しているかについてみる。

図1 「信頼感」クラスター、問4、問5、問6の
配置図：日本

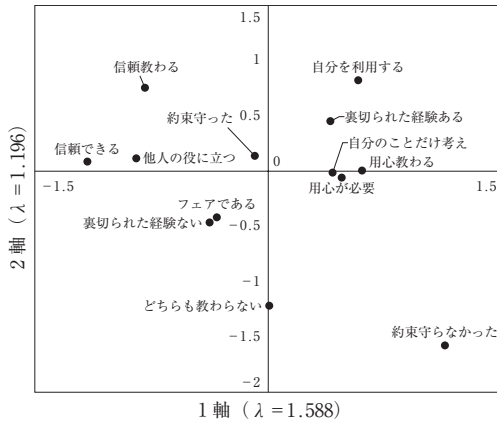


図2 「信頼感」クラスター、問4、問5、問6の
配置図：台湾

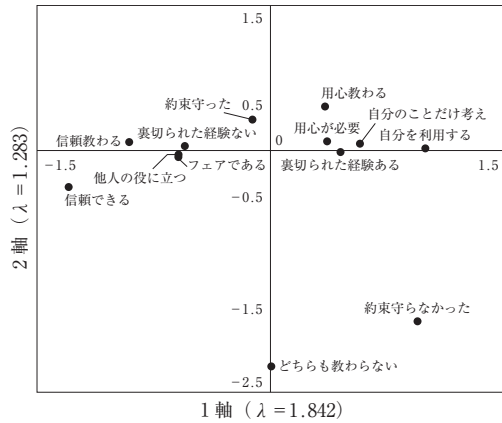


図3 「信頼感」クラスター、問4、問5、問6の
配置図：アメリカ

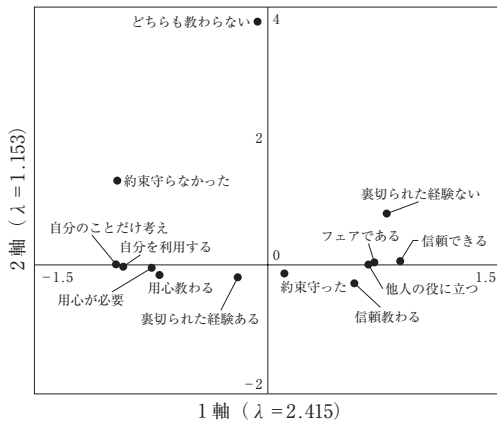
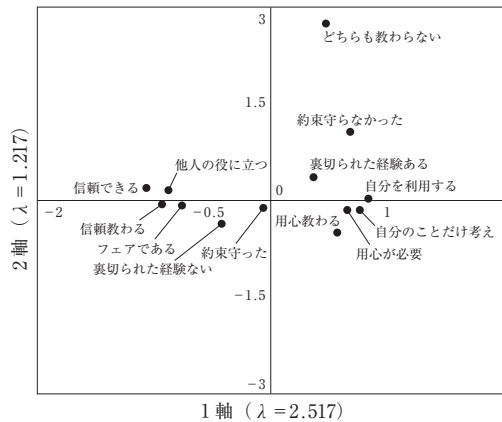


図4 「信頼感」クラスター、問4、問5、問6の
配置図：ドイツ



日本(図1)については、1軸の左側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の右側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」が布置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「どちらも教わらなかった」と「約束を守らなかった」は、このクラスターからかなり離れて布置し、このクラスターとの関連は弱い。

台湾(図2)については、1軸の左側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の右側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」が布置し、「低信頼感」クラスターと関連している。なお、「どちらも教わらなかった」と「約束を守らなかった」は、このクラスターからかなり離れて布置し、このクラスターとの関連は弱い。

アメリカ(図3)については、1軸の右側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の左側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」、「どちらも教わらなかった」が布置し、「低信

図5 「信頼感」クラスター, 問4, 問5, 問6の
配置図: チェコ

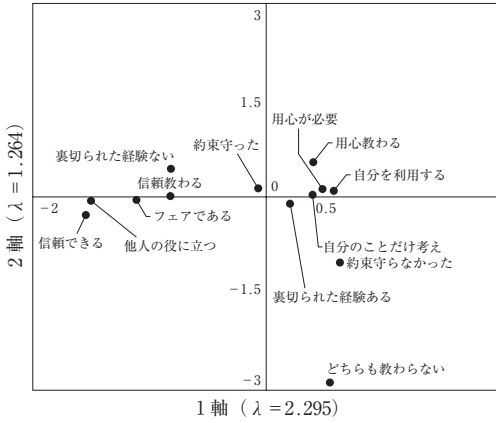


図6 「信頼感」クラスター, 問4, 問5, 問6の
配置図: ロシア

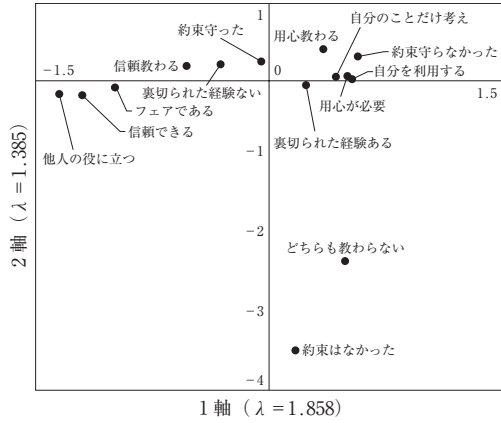


図7 「信頼感」クラスター, 問4, 問5, 問6の
配置図: トルコ

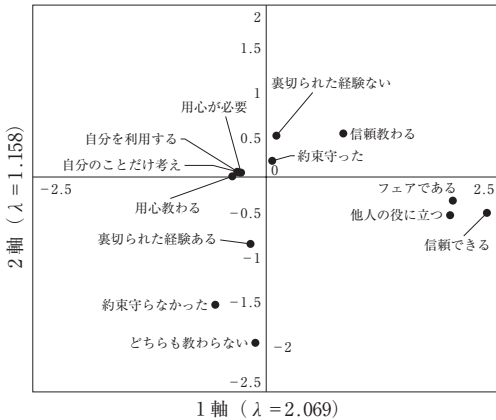
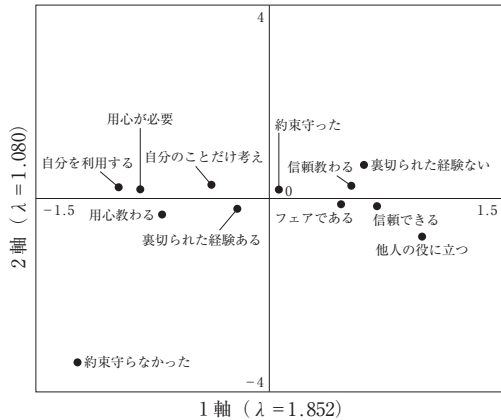


図8 「信頼感」クラスター, 問4, 問5, 問6の
配置図: フィンランド



「信頼感」クラスターと関連している。ただし、「どちらも教わらなかった」は、このクラスターからかなり離れて配置し、このクラスターとの関連は弱い。

ドイツ(図4)については、1軸の左側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が配置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の右側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」、「どちらも教わらなかった」が配置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「どちらも教わらなかった」は、このクラスターからかなり離れて配置し、このクラスターとの関連は弱い。

チェコ(図5)については、1軸の左側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が配置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の右側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」、「どちらも教わらなかった」が配置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「どちらも教わらなかった」は、このクラスターからかなり離れて配置し、このクラスターとの関連は弱い。

ロシア(図6)については、1軸の左側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経

験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の右側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」、「どちらも教わらなかった」、「約束することはなかった」が布置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「約束することはなかった」と「どちらも教わらなかった」は、このクラスターからかなり離れて布置し、このクラスターとの関連は弱い。

トルコ（図7）については、1軸の右側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の左側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」、「どちらも教わらなかった」が布置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「約束を守らなかった」と「どちらも教わらなかった」は、このクラスターからかなり離れて布置し、このクラスターとの関連は弱い。

フィンランド（図8）については、1軸の右側に「信頼を教わる」、「約束を守った」、「裏切られた経験がない」が布置し、「高信頼感」クラスターと関連している。1軸の左側に「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」が布置し、「低信頼感」クラスターと関連している。ただし、「約束を守らなかった」は、このクラスターからかなり離れて布置し、このクラスターとの関連は弱い。

4. 要約・結論

本研究の目的は、「信頼感」の形成にとって非常に重要といわれてきた親による子供の「信頼感」の社会化、親の子供との約束の順守、裏切られた経験の有無が、子供が成人になったときの「信頼感」とどのように関連しているかについて、先行研究を踏まえ、解明を試みることである。本研究では、日本、アメリカ、ドイツ、チェコ、ロシア、トルコ、フィンランドの7カ国と台湾において、「信頼感」スケールを構成する3つの質問と、「信頼感」の形成に関すると思われる3つの質問の計6問の回答項目について多重コレスポネンス分析を行った。その結果、「信頼感」スケールの3つの質問の回答項目が、それぞれの国・台湾において、2つのクラスターとなって布置図の1軸の原点から左右に形成されていることが判明し、それぞれを「高信頼感」クラスター、「低信頼感」クラスターと命名した。そして、「信頼感」の形成に関する3問の回答項目が、それぞれ、1軸の原点から左右に、肯定と否定に分かれて布置していることが明らかとなった。

7カ国・台湾の両クラスターと「信頼感」の形成に関する3問に対する回答項目との関連をまとめる。「高信頼感」クラスターに関連する項目は、7カ国・台湾とも「信頼を教わる」、「約束をよく守った」、「裏切られた経験がない」の3項目である。「低信頼感」クラスターに関連する項目は、7カ国・台湾とも「用心を教わる」、「約束を守らなかった」、「裏切られた経験がある」の3項目である。したがって、「信頼感」の形成に関しては、子供のときの親による「信頼感」の社会化、子供のときの親の約束の順守、裏切られた経験の有無は成人になったときの「信頼感」の高低に影響を及ぼすことが明らかとなった。

ただし、「どちらも教わらなかった」は、日本、台湾、フィンランド以外の5カ国において、また「約束を守らなかった」は、ロシア以外の6カ国・台湾において、「低信頼感」クラスター

と程度は弱いものの関連がみられ、「信頼感」の形成にとってマイナスのインパクトとなることが明らかとなった。

本研究では、「信頼感」の形成について考察した。その結果、前述の先行研究が、大方支持されたといえる。社会的、文化的、そして世界価値観調査に基づく信頼度スケールのレベルが異なる7カ国・台湾において、「信頼感」の形成に関し同様の結果が実証的に証明されたことは興味深い。今後はさらに研究が進展することを期待する。

謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費（基盤(A)「グローバル時代における「信頼感」に関する実証的国際比較研究」(2007年度～2010年度)、基盤(B)「社会構造と「価値観」に関する実証的国際比較研究—「信頼感」との関連性を中心に」(2010年度～2013年度)、基盤(C)「「信頼感」の実証的国際比較研究」(2014年度～2016年度)）(いずれも研究代表：佐々木正道)の助成により行われた。ここに感謝の意を表したい。

注

- 1) 親の子供の社会化への影響で避けることができない特徴について、R. マートン (Merton 1968: 212) は、「子供は親の日頃の行動と親の何気ない会話を目の当たりにする社会的プロトタイプ(手本)に晒されている」と述べている。
- 2) R. イングルハート (Inglehart 1985: 103) は、「個人の基本的価値観は、大人になる以前の広くいきわたった状況をかなり反映するという社会化仮説」を提起した (Abramson & Inglehart 1995: 25も参照のこと)。
- 3) 約束に関連する「信頼感」の社会化についての実証的研究は数が少ない。
- 4) 信頼に違反することや信頼の裏切りに関する研究は限られているが、Akerstom 1991; Bausmeister et al 1990; Leary, et al. 1998; Mayer & Johnson 1988; Metts 1994; Jones & Scott 1997; Weber & Carter 2003 などがある。
- 5) この3問は、Three-Item Rosenberg Scale または Misanthropy Measures といわれている。3問のうち、問3の1問だけを用いた研究があるが、それは「信頼感」スケールとしては不十分と指摘されてきた。(詳細については、Sasaki & Saito (2014: 48) を参照のこと)。
- 6) この問は、P. サピエンザ他 (Sapienza et. al 2007, 2013) によると、信頼の経済的効果を分析した約500の文献で「信頼感」スケールとして使用されている。
- 7) 本稿のすべての布置図において1軸(横軸)と2軸(縦軸)の値は相対的であり、符号は、質問項目の意味と無関係である。また、各布置図に問2の回答2を“フェアである”と記載する。
- 8) ここでの成人は、調査対象者である20歳以上を意味する。

参考文献

- Abramson, P. & Inglehart, R. (1995). *Value Change in Global Perspective*. Ann Arbor, Michigan: The University of Michigan Press.
- Akerstom, M. (1991). *Betrayal and Betrayers: The Sociology of Treachery*. New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers.
- ASEP/J DS. (2010). www.jdsurvey.net/jds/jdsurveyMaps.jsp?Idioma=I&SelectionTexto=0404&NOID=104.
- Baier, A. C. (1986). Trust and antitrust. *Ethics*, 96, 231-260.
- Barber, B. (1983). *The Logic and Limits of Trust*, New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press.
- Baumeister, R. F., Stillwell, A. & Wotman, S. R. (1990). Victim and perpetrator accounts of interpersonal conflicts: Autobiographical narratives about anger. *Journal of Personality and Social Psychology*,

- 59, 994-1005.
- Bernath, M. S. & Feshbach, N. D. (1995). Children's trust: Theory, assessment, development and research directions, *Applied Perspective Psychology*, 4, 1-19.
- Bok, S. (1978). *Lying: Moral Choice in Public and Private Life*. New York: Panthen.
- Bussey, K. (2010). The role of promises for children's trustworthiness and honesty (pp.155-176) in Rotenberg, K. (ed.). *Interpersonal Trust: During Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- Delhey, J. & Newton, K. (2003). Who trusts: The origins of social trust in seven nations. *European Societies*, 5, 93-137.
- Dietz, G., Gillespie, N. & Chao, G. (2010). Unraveling the complexities of trust and culture (pp.3-41) in Saunders, M., Skinner, D., Dietz, G., Gillespie, N. & Lewicki, R. (eds.). *Organizational Trust: A Cultural Perspective*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Erikson, E. (1950/1963). *Childhood and Society*. Second ed. New York: W. W. Norton.
- Gheorghiu, M., Vignoles, V. & Smith, P. (2009). Beyond the United States and Japan: Testing Yamagishi's emancipation theory of trust across 31 nations. *Social Psychological Quarterly*, 12, 365-383.
- Golembiewski, R. T. & McConkie, M. (1975). The centrality on interpersonal trust in group processes (pp.131-85) in Cooper, C. L. (ed.). *Theories of Group Processes*. New York: Wiley.
- Greenacre, M. (2004). Correspondence analysis (pp.203-205) in Lewis-Beck, M., Bryman, A. & Liao T. (eds.). *The Sage Encyclopedia of Social Science Research Methods*. Thousand Oaks: California.
- Greenacre, M. & Blasius, G. (eds.). (1994). *Correspondence Analysis in the Social Sciences*. London: Academic Press.
- Hirsch, F. (1978). *Social Limits of Growth*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Holmes, J. G. & Rempel, J. K. (1989). Trust in close relationships (pp.187-219) in Hendrick, C. (ed.). *Review of Personality and Social Relationships: Vol 10*. Newbury Park, Calif: Sage.
- Inglehart, R. (1985). Aggregate stability and individual-level flux in mass belief systems: The level of analysis paradox. *American Political Science Review*, 79, 97-116.
- Jesuino, J. (2008). Theorizing the social dynamics of trust in Portugal (pp.179-206) in Markova, I & Gillespie, A. (eds.). *Trust and Distrust: Sociocultural Perspectives*. Charlotte, N. C.: Information Age Publishing.
- Jones, W., Couch, L. & Scott, S. (1997). Trust and betrayal: The Psychology of getting along and getting ahead (pp.465-482) in Hogan, R. Johnson, J. & Briggs, S. (eds). *Handbook of Personality Psychology*. New York: Academic Press.
- Kramer, R. & Cook, K. (eds.). (2004). *Trust and Distrust in Organizations*. New York: Russell Sage Foundation.
- Lamb, M. & Lewis, C. (2011). The Role of parent-child relationships in child development (pp.259-308) in Lamb, M. & Bornstein, M. (eds.). *Social and Personality Development*. London and New York: Routledge.
- Leary, M. R., Springer, C. Negel, L., Ansell, E. & Evans, L. (1998). The causes, phenomenology, and consequences of hurt feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1225-1237.
- Le Roux, B. & Rouanet, H. (2010). *Multiple Correspondence Analysis*. Los Angeles: Sage.
- Lewis, J. & Weigart, A. (1985). Trust as a social reality. *Social Forces*, 63, 967-985.
- Luhmann, N. (1979). *Trust and Power*. New York: John Wiley and Sons.
- Mayer, L. & Johnson, J. M. (1988). Courtship violence and the emotional career of betrayal. *Studies in Symbolic Interaction*, 9, 187-199.

- Merton, R. (1968). *Social Theory and Social Structure*. New York: The Free Press.
- Metts, S. (1994). Relational transgression (pp.217-239) in Cupach, W. R. & Spitzberg, B. H. (eds.). *The Dark Side of Interpersonal Commitment*. London and New York: Routledge.
- Mikulincer, M. (1998). Attachment working models and the sense of trust: An exploration of interaction goals and affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1209-1224.
- Miller, P.J.E. & Rempel, J.K. (2004). Trust and partner-enhancing attributions in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30: 695-705.
- Newton, K. (1997). Social capital and democracy. *American Behavioral Scientist*, 40, 575-586.
- Paxton, P. (2007). Association memberships and generalized trust: A multilevel model across 31 Countries. *Social Forces*, 86, 47-76.
- Potter, N. (2002). *How Can I be Trusted?: A Virtue Theory of Trustworthiness*. New York: Rowman & Littlefield Publishers.
- Randall, B., Rotenberg, K., Totenhagen, C., Rock, M. & Harmon, C. (2010). A new scale for assessment of adolescents' trust beliefs (pp.247-269) in Rotenberg, K. (ed.). *Interpersonal Trust: During Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- Rotenberg, K. (1991). Children's interpersonal trust: An introduction (pp.1-4) in Rotenberg, K (ed.). *Children's Interpersonal Trust: Sensitivity to Lying, Deception, and Promise Violations*. New York: Springer.
- Rotenberg, K. (1995). The socialization of trust: Parents' and their children's interpersonal trust. *International Journal of Behavioral Development*, 18, 713-726.
- Rotenberg, Ken J. (2010). The conceptualization of interpersonal trust: A basis, domain and target framework (pp.8-27) in Rotenberg, K. (ed.). *Interpersonal Trust: During Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- Rotenberg, K., McDougall, P., Boulton, M., Vaillancourt, T., Fox, C. & Hymel, S. (2004). Cross-sectional and longitudinal relations among peer-reported trustworthiness, social relationships, and psychological adjustment in children and early adolescents from the United Kingdom and Canada. *Journal of Experimental Child Psychology*, 88, 46-67.
- Sapienza, P., Toldra, A. & Zingales, L. (2007). Understanding trust. *Working paper* 13387. National Bureau of Economic Research, Cambridge and (2013). *The Economic Journal*, 123, 1313-1332.
- 佐々木正道 (編). (2014). 『信頼感の国際比較研究』東京：中央大学出版部.
- Sasaki, M. (ed.). (2019). *Trust in Contemporary Society*. Leiden, The Netherlands and Boston, U. S. A.: Brill.
- Sasaki, M. (2022). Trust and media use in everyday life in Japan. *Comparative Sociology*, 21, 105-141.
- Sasaki, M. & Marsh, R. (eds). (2012). *Trust: Comparative Perspectives*. Leiden, Holland and Boston, MA.: Brill.
- Sasaki, M. & Saito,T. (2014). Measurement of general trust: A cross-national analysis. 『中央大学社会科学研究所年報』, 第19号, 47-64.
- 佐々木正道・吉野諒三・矢野善郎 (編). (2018). 『現代社会の信頼感：国際比較研究(II)』東京：中央大学出版部.
- Simmel, G. (1950). *The Sociology of Georg Simmel*. Trans. and ed, by K. H. Wolff. New York: Free Press.
- Six, F. (2005). *The Trouble with Trust*. Northampton, MA.: Edward Elgar Publishing.
- Smetana, J. (2010). The role of trust in adolescent-parent relationships: To trust you is to tell you

- (pp. 223-246) in Rotenberg, K. (ed.). *Interpersonal Trust During Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- Sutter, M. & Kocher, M. (2007). Trust and trustworthiness across different age groups. *Games and Economic Behavior*, 59, 364-382.
- Sztompka, P. (1999). *Trust: A Sociological Theory*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sztompka, P. (2014). Trust (pp. 492-498) in Sasaki, M., Goldstone, J., Zimmermann, E. & Sanderson, S. (eds.) . *Concise Encyclopedia of Comparative Sociology*. Leiden, Hollands & Boston, U. S. A.: Brill Academic Publishers.
- Uslaner, E. (1999). Democracy and social capital (pp.121-150) in Warren, M. (ed.). *Democracy and Trust*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Uslaner, E. (2000). Producing and consuming trust. *Political Science Quarterly*, 115: 569-590.
- Uslaner, E., (2002). *The Moral Foundations of Trust*. New York: Cambridge University Press.
- Weber, L. & Carter, A. (2003). *The Social Construction of Trust*. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers
- Yamagishi, T. (2000). *Trust—The Evolutionary Game of Mind and Society*. Tokyo: Springer.
- Yamagishi, T., Cook, K. S. & Watabe, M. (1998). Uncertainty, trust and commitment formation in the United States and Japan. *American Journal of Sociology*, 104, 165-194.
- Yamagishi, T., Kikuchi, M. & Kosugi, M. (1999). Trust, gullibility, and social intelligence. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 145-161.
- Yamagishi, T., Nakazawa, S., Mashima, R., & Terai, S. (2005). Separating trust for cooperation in a dynamic relationship: Prisoner's dilemma with variable dependence. *Rationality and Society*, 17, 275-308.
- Yoshino, R. (2002). A time to trust — A study on people's sense of trust from a viewpoint of cross-national and longitudinal study on national character. *Behaviormetrika*, 29, 231-260.
- Yoshino, R. (2009). Reconstruction of trust on a cultural manifold: Sense of trust in longitudinal and cross-national surveys of national character. *Behaviormetrika*, 36, 114-147.
- Zucker, L. G. (1986). Production of trust: Institutional sources of economic structure, 1980-1920. *Research in Organizational Behavior*, 8, 53-111.

Abstract

An Empirical Cross-National Study of Trust Formation

Masamichi Sasaki

In trust research, the formation of trust has been extensively discussed. The present study used the data of nationwide attitudinal general social surveys conducted among seven nations (i.e., Japan, the United States, Germany, the Czech Republic, Russia, Turkey, and Finland) and Taiwan that manifest four different national levels of trust (i.e., high, relatively high, middle, and low). It found that parental socialization of trust (i.e., being taught by parents during childhood), parents keeping promises during childhood, and the absence of experiences of betrayal significantly impact trust in adulthood. Conversely, parental socialization of distrust, parents not fulfilling childhood promises, and experiences of betrayal significantly impact distrust in adulthood. These findings empirically support some of the speculations gleaned from trust literature. Interestingly, this study revealed that those who were not taught by their parents to trust or taught to be too careful in dealing with people during childhood become distrustful to some extent in adulthood; Japan, Taiwan, and Finland were exceptions. Further, the impact of parents not keeping promises during childhood on distrust in adulthood is moderate, with Russia being an exception. The findings reveal a consistently significant impact of parental socialization of trust/distrust and of experiences of betrayal on subsequent adult trust/distrust. Indeed, this was found to be a common phenomenon among all seven nations and Taiwan, regardless of the differences in their social, cultural, and national levels of trust.

Key words: trust formation, cross-national attitudinal social surveys, multiple correspondence analysis

付録1

本研究は7カ国・台湾において20歳以上の被験者を対象に全国規模の面接調査を実施した。調査時期、サンプル数、調査方法は以下のとおりである。

	調査時期	サンプル数	調査方法
日本	2008年10月	924	層化2段無作為抽出（130地点）
台湾,	2009年10-11月	1,005	クオータサンプリング（138地点）
アメリカ	2008年11-12月	1,008	クオータサンプリング（100地点）
ドイツ,	2009年4-5月	1,007	ADM マスターサンプリングによる層化多段無作為抽出（153地点）
チェコ	2009年9月	981	クオータサンプリング（184地点）
ロシア	2009年2月	1,600	クオータサンプリング（140地点）
トルコ	2010年1-2月	1,007	クオータサンプリング（86地点）
フィンランド	2012年5月	881	クオータサンプリング（87地点）

付録2

表1 7カ国・台湾の間1・問2・問3の集計表（%）

	日本	台湾	アメリカ	ドイツ	チェコ	ロシア	トルコ	フィンランド
有効回収数	(924)	(1,005)	(1,008)	(1,007)	(981)	(1,600)	(1,007)	(881)
問1 たいていの人は、他人の役にたとうとしていると、思いますか、それとも自分のことだけを考えていると思いますか。								
1. 他人の役にたとうとしている。	30	48	58	44	20	23	13	26
2. 自分のことだけを考えている	61	47	39	50	74	71	83	70
3. その他	2	0	2	2	4	1	1	0
4. わからない	7	5	2	4	3	5	3	5
問2 他人は、機会があれば、あなたを利用しようとしていると思いますか。それともそんなことはないと思いますか。								
1. 他人は機会があれば自分を利用しようとしていると思う。	31	29	40	42	52	56	83	30
2. そんなことはないと思う	59	51	56	47	28	31	11	65
3. その他	2	0	1	1	5	1	1	0
4. わからない	8	20	3	10	15	12	5	5
問3 あなたは、たいていの人は信頼できると思いますか、それとも用心するにこしたことはないと思いますか。								
1. 信頼できる	27	21	45	35	22	28	10	54
2. 用心するにこしたことはない	68	76	52	58	72	67	88	44
3. その他	1	0	1	1	2	1	0	0
4. わからない	4	3	2	6	4	4	2	2

注：数値は四捨五入のため合計は必ずしも100%にはならない。